

| | |
|--------------|---|
| Title | 巻頭言 大阪大学低温センターだより No.50 |
| Author(s) | 長谷田, 泰一郎 |
| Citation | 大阪大学低温センターだより. 1985, 50, p. 1-2 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/6142 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

巻頭言

50号寄稿依頼

低温センターだより編集委員長

長谷田 泰一郎

先日の低温センターだより編集委員会で、50号は編集委員全員による低温の将来についての夢を語る といった内容の特集号を作ろうということになりました。特集号の題名案も含めて、各位の寄稿をお願いします。

編集委員会でもお話ししました私の考えを別紙同封しますので御参照下さい。こんな感じで、気楽に皆で書きましようや といったつもりです。

委員会の席で、20才台の若い人の意見も載せたい、ということにもなりました。院生に依頼して全体(全学)で10編位入れたいと思います。

では、何かおもしろいものが出ることを期待しています。

- ◆ 締切 昭和60年1月15日
- ◆ 枚数 400字詰 1~5枚〔3枚(刷上り1ページ相当)を標準として下さい。〕
- ◆ 送先 低温センター吹田分室 山本
豊中分室 吉田 のいずれかへ

低温センターだより50号記念特集

- 題名; 「〇〇年後の低温研究に何をみるか」
「〇年後の低温分野にみえるもの」
「ゆめ」 などなど

去年の編集委員会の忘年会の折、来年4月の50号は何か特集号にしようという話になった。編集委員全員で、低温の将来についての、ゆめを語ろうなどと僅かのアルコールの勢いと、ま いずれ1年先のことということで、あっさり意見の一致があった。(*:昭和58年暮の忘年会)

さて、たちまち1年経ってみると ということであるが、私にとっては最後の号であって、最後は希望にもえたものにしたいと思う心があるので、是非これまで一緒に50号まで育てて下さった編集委員の方々と一緒に、他の人達——殊にえらい人達には御遠慮願った——特集号にしてみたいと思うのです。

毎回の編集委員会で話題を集めている時、いつも思っているのは「低温という言葉にとらわれないようにしよう。我々は、今、だまたま低温という——それも液体ヘリウムを中心とした広いスペクトルの分布のある——窓からのぞいているが、いつでもみているのは物理一般だ」ということを強調して原稿を依頼してきた。

幸いなことに、阪大には非常に広い研究の分布がある。お互いに全く違った分野にいてると思っ

者同志が、実は、ほとんど同じ問題を考えているのだと気がついた時、それだけで一つの前進になる。そんな心でこのサーキュラーを編集してきた我々が、今この機会に正月のホッとする時空のあいまも含めて、ひと月ほどの間、低温という窓の向こうの景色に“ゆめ”を描いてみようと思うのです。他の集団とは違った見方が自然にできているかも知れないと思うのである。

夢には、正夢から夢のまた夢まである。

「〇〇年後の………」というのは、各人勝手に設定すればよい。何がどうなるか根拠は全く無くてよい。根拠があるなら夢ではない。

例えば、私は50年以内に液体窒素温度における超伝導があって、He以外の超流動が見つかるだろう、と書くだらう。これは、100年後にもそんなものはないだろう、と書くのとは違うのである。我々の集団ではどんな分布になるだらうか。我々はどれ位オプチミスティックで、どれ位ペスミスティックであるか。

又、こんな設問もあると思う。「我々は現在もうほとんど低温の底にいるのだらうか。」というのは核磁気モーメント間の相互作用より微弱なエントロピー源を()我々は持っていない。カッコの所に(現在のところ)と言って話をする人々があるが、それでは現状の記述に過ぎない。(今後とも)と入れるなら conjecture である。私は何年後には、とは言えないが、いずれこの壁には孔があけられて、より低温に進むだらう、と書く。我々の分布はどの辺にあるだらうか。

ところで、何もそんなに低温へ低温へと降りていなくても、現在の最低温度：ミリ度、マイクロ度の領域で、まだまだ全く新しい物性を自然は用意してくれるのではないだらうか。

私は、ま、当分ここ(ミリ度、マイクロ度の領域)で飯の食えることは確かである、と書く。おそらくここでかなりの数の提案があるのは健康だと思う。ついでに言えば、今こそ常温を見直そうという具体的な企画の提示が一つや二つはあってよい。一つもなければ我々は低温病の集団だというそしりを免れない。

最後に、檄文らしく一言。我々の間から夢が浮かび上がらなければ、日本の低温はお先真っ暗である。

夢 in 低温

夢とうつつの間で

基礎工学部 天 谷 喜 一

低温の研究をはじめたばかりの学生の頃、「on族がいなくなって何か面白い事があるのか」と聞かれて返答に窮した事がある。以来悩み続けて現在に至っている。今、低温の将来の夢を語れとの事である。いささかキツイ御注文なので、夢は夢多き方々におまかせして、ここではとりあえず面白そうな話題を身近かな所で2～3ひろって、夢と現実のバランスをとる事とする。